

ピストリウス

シュルツェ著 『カント』 『純粹理性批判』 解説』 書評（上）

城戸 淳 訳

# Rezension von J. Schulzes Erläuterungen zur Kants Kritik der reinen Vernunft

Hermann Andreas Pistorius

Erläuterungen über des Herrn Professor Kant Kritik der reinen Vernunft von  
Joh. Schultze [...]. Königsberg [...] 1784 [...], in : *Allgemeine deutsche Bibliothek*, Bd. 66,  
1. Stück, 1786, S. 92–123. [von H. A. Pistorius]

Erster Halbteil

Übersetzt von  
KIDO Atsushi

【90】

『カント教授氏の『純粹理性批判』についての解説』プロイセン王宮説教師ヨハン・シユルツェ著、ケーニヒスブルク、デンゲル出版、一七八四年、八つ折り版、二五四頁。

カント理解へのシユルツェ氏の貢献

『カント教授氏の『純粹理性批判』についての解説』（＝『解説』）によって、この重要ではあるが把握しがたい著作（『純粹理性批判』）の内容が、閑暇と辛抱には事欠いても、深遠な思考の哲学者の体系へと踏みこんで研究する能力にまったく欠けるわけではないような読者に対して開かれるようになって、いまやその内容を理解する労苦はより少なくなり、内容について哲学的に熟考することに携わることができるようになったからには、この『解説』は unnecessary な余計なものでもない。そのことは、この著作についてなんらかの見解を述べたあらゆる専門家や半可通がこの著作の難解さについて（つとに）嘆いてきたからには、すでにその嘆きによって彼らはそう認めた（も同然である）と私には思われる。

それゆえシユルツェ説教師氏は、この『解説』によって哲学と哲学愛好者に対して喜ばしくも大切な貢献を果たしたのであり、それというのもアリストテレスの時代以来、形而上学について書かれたもつとも重要な書物についての、カント教授氏自身が承認したこの明解なコメントリーをわれわれに提供したからであって、シユルツェ氏は確かにすべての思弁的な思索者からの感謝に値するのである。【93】

しかしカント説の難点は解決されていない

この『解説』は、カント氏の著作の内容を簡潔にまとめた説明と——そこでは「カントの」体系がより常識的な言葉遣いで提示されているが、しかし同時にカント氏の術語法が示されて説明されている——、ついでこの体系のさらなる吟味へのいくつかの示唆とから成る。

私が思うには、カント氏の『批判』と『プロレゴメナ』の読者で、この『解説』によって多くの不分明な点が解明され、カント氏の本来の意図に関わる困難な点を取り除かれ「たという体験をし」ない人は少ないだろう。すくなくとも書評子の認めるところでは、『プロレゴメナ』においてさえも理解しかねた多くの論点がより判明に「分かるように」なり、いまやカント氏を理解しえたとすくなくとも自分では思うようになったのである。

にもかかわらず、時間と空間に関するカント氏の原則や、そこに根拠をもつ仮象 (Schein) と真理についての氏の理論が惹起したかなりの難点が、解決されていないままだと私には思われる。それらについては、すでに私は『プロレゴメナ』への書評（『一般ドイツ文庫』〔一七八四年〕第五九卷、三四五頁）で述べておいたが、「このたび」この『解説』を喜び勇んで手にとり、そこにおそらく私の疑問が解決されているのを見出そうとしたのである。

しかしながら、すでに言ったように、以下のような疑問について私に説明してくれるものには、まったく出会わなかった。すなわち「私の疑問とは、著者の体系では、」あらゆる仮象を可能にするもの（すなわち、あらゆる仮象においてつねに前提されなければならない、それゆえそれ自身は仮象ではありえないもの）が、あるいは一言でいえば表象と思考そのものが、仮象であるべきだというのなら、著者の体系においてはそもそもいかにして仮象が可能になるのか、「とということであった」。

そして、やはり「著者によれば」表象と思考はそのよう「な仮象」であるほかない。なぜなら、あらゆるわれわ

れの思考は継起的に時間規定にしたがって起きるのであり、さらに、空間と時間はわれわれの感性のたんに主観的な形式にすぎないのであって、空間のなかで直観され、時間規定にしたがって感覚され思考されるものは、現象 (Erscheinung) にほかならないからである。

### シュルツェ氏の示唆

この『解説』からの抜粋によってカント氏の原則と体系に関してさらにお伝えするかわりに——そのようなことは、この『解説』が出たからにはほとんど不必要になったと私は思う——、むしろ私はあえて、『批判』のさらなる吟味に関してシュルツェ氏が与えた示唆 (の帰趨) を、私の力が許すかぎりで追跡してみようと思う。

そこで、まずは上述の仮象と実在性についての疑念をさらに展開することにつとめ、ついでこの疑念が導いて私にもたらした諸考察に立ち入ることにするが、**[94]** 厳密な順序だてに拘るつもりはない。そのさい私は同時に、カント氏の偉大な業績、とりわけまた『プロレゴメナ』を考慮しつつ述べることにしよう。

### 魂も客観もすべて仮象と現象に呑みこまれる

表象と思考が現象であるという前提のもとでのみ、われわれはみずからの思考する主観についてなにも知らない、著者は主張することができたのである。というのは、表象と思想が主観のもつ真なる、すなわち主観そのものと同種な作用であるならば、われわれはやはりこの主観について、それが表象力であり、あるいは思想の源であると知っているはずだからである。

さてしかし、表象がたんに仮象的な (scheinbar) 作用であるにすぎないというならば、すなわち、人がふだん

仮象的に理解してきたものは、それ自体としては、ある第三者の主観に対して「もそのように」見えるものでも、この第三者の主観がそう表象しているとおりのもでもない、というならば、われわれはある仮象からべつ々の仮象へと彷徨い、われわれの個体的な実存在に關してさえも、漂い揺れるような厄介な状態にいたって、われわれはどこにもみずからを支えられず、どこにも立つことができなくなってしまう。

さて、それ自身で存立する主観——その主観の変様がわれわれの表象と思想である——がじつさいに実存在するかどうかが不確定で蓋然的であるならば、また同様に、われわれの外的な感覚に現実的に客観が対応しているかどうかも不確定で蓋然的である。それゆえこの体系にしたがうなら、無限に果てなく仮象だけがあつて、われわれはたんに実存在しているように「仮象的に」見えるにすぎず、われわれの實在的な現存在について省察しても、確固たる確実な基盤について省察しても、われわれはこれらのあらゆる仮象的存在者を確実なものにすることができないということ、大いにありうる話なのである。

われわれがふつうの言葉遣いでわれわれの魂 (Soul) と呼んでいるものは、この体系ではたんに論理的な、すなわち仮象的な主観にすぎないのであつて、それ自身で存立する真なる実体ではなく、じつさいのところはたんに流れゆく諸表象の系列にすぎない。これらの表象は、自己意識（これも同じく一種の流れゆく表象である）によつて思想へと結合され、べつ々の仮象的な表象（これは悟性概念あるいはカテゴリーと呼ばれる）によつて規則的な連結へともたらされ、さらにべつ々の表象（すなわち理性理念）——しかしこれもたんに主観的で錯覚的なものにすぎない——によつて無限に連結された系列へと拡張される。この表象の流れは人知れずどこからか発し、だれに対して、何のためにか分からぬまま流れつづけ、そしてどこへと流れ去るのかだれも知らない。

この体系にしたがえば、直観はあるが、直観する確かな主観はなく、直観される定まつた客観もなく。【95】

の体系では、思考する主観の眞の統一は成立せず、すべての統一はたんに論理的で主観的な連結にすぎず、多様を統合するにすぎない。「統合するとはいえず」ところが、単純な統合する主観は存在すべくもなく、単純な自己意識の感覚から一つの単純な連結し統合する主観へと、すなわち仮象的な統一から眞の統一へと推理するならば、誤謬推理ということになる。

そこで、この体系によれば、私〔あるいは自我〕という表象もまたまったく空虚なもので、「そこから」いかなる正当な帰結も導かれるはずもなかったのである。自我の表象は、あるべつの表象が思想において統握されるという場合に、そのべつの表象に伴わなければならなかった表象にすぎない。しかしその思想も、なにも実在的なものへと指示するものではなく、われわれの思考する本体の本性について教えるようなものをなにも含んでいないというのである。

ところが私が思うには、私という表象には、第一に他のあらゆる対象からの区別が、第二にはこの私のもとに概念把握されるすべての諸表象を統合する作用が、最後に私によって表示される思考する主観へとその諸表象が帰属していることが、含まれている。したがってこの表象は、個性性 (Individualität) の感覚と概念を含み、自己中心主義 (Egoismus) と呼ばれるものを含むのである。

ここで無限につづく仮象と現象のなかに囚われたくないのであれば、われわれは以下のように想定せねばならないはずである。すなわち、この思考する個体的な本体は——この思考体は、みずからは他の思考する本体からは区別されるので、その自己感情に関してけっして他の思考体の特性あるいは述語にはなりえない、ということを意識している——、現実的に現前し、じっさいに物それ自体なのであって、表象と思想は現実的な眞の作用、すなわちこの物それ自体と同種の作用である、と〔いう想定である〕。

というのは、表象や思想が仮象たりうるとすれば、何によってであろうか。おそらく、新たな表象力によって、のほかにないだろう。——そしてこのとき、この新たな表象力が現象であるためにはさらに新たな表象力を必要とするのであって、「こうして」われわれは紛うことなき無限へ、背進を想定せねばならないのである。

——ここまでで述べられたことは、著者の原則から導かれた帰結ばかりであり、その原則を本当に反駁しようとするものではないが、ともかくこの体系に安んじて納得しうるために、まずもって取り除かれなければならない真の困難であるように私には思われる。それゆえ、この帰結をさらに追跡し、【96】あるいはむしろ、それをカント氏の体系のべつの部分へと適用することにさせていただきたい。

錯覚の感性界からスピノザ的な実体へ

この体系によれば、理性は自然の出来事と原因の系列が完結することを要求し、その系列の外側に限界を求め、制約されたものから無制約的なものへと上昇していくのであるが、ほかにどこにも求めた完結と充足を見出すことができないために、ある限界を、あるいは無制約的なものとしての知られざる或るものを、想定せねばならないことになる。——

私が間違っていないければ、この仮象と真についての理論の教えと導きにしたがうかぎり、理性は全経験とその原因のそのような完結を、系列そのもののなかでだけ見出しうるし、見出さねばならない。

悟性界が感性界の根底に存して対応しており、なにか実在的なものが現象の根底に存して対応していると前提され、「さらにはしかしながら」あらゆる継起的な表象、すなわち時間規定に関わるような表象は、たんに仮象的で主観的なもので、実在性において、あるいは客観的な悟性界においては、なにもそれに似たものや対応するものが



成立していないと前提されるならば、この世界はそれ自身で存立する物であり、それ自身だけで十分であつて、みずからを限界づけていたのである。この世界には始まりも終わりもない。同時にあるものとして空間のなかで、あるいは相継いで続くものとして時間のなかで表象されるいつさいの多様なものは、すなわちこの多様にして入れ替わつてゆくものは、理性に強いてある限界と無制約的なものを求めるようにさせるにせよ、たんに錯覚にすぎないのである。

これは、ある人が流れを下つていくとき、その流れが曲がついて、またもとに戻るようなかたちの線になつていくということを知らずに、自分はふたたび上ることもなく、ずっと下つていくのであつて、この流れには始まりと水源があり、終わりあるいは河口がある、と思ひ込んでいるが、しかしこれはすべて仮象にすぎない、という場合のような錯覚と等しい。

もちろん、これまで哲学者も素人もそう思つてきたように、時間になにか客観的なもので、すくなくとも一部は物自体のなかに根拠づけられた表象であると見なすかぎりは、われわれは自然の系列の始まりと終わりを前提せねばならないし、われわれの理性はこの系列のそとにその完結を求め、あらゆる制約的なものに対してさらに無制約的な或るものを要求せねばならない。しかしながら、われわれがその誤りを悟り、時間におけるあらゆる継起と、空間におけるあらゆる多様とを、たんに主観的で仮象的なものとして認識するならば、われわれはまた理性に対して、**[97]**この継起的で多様なものを客観的な悟性界にまで持ちこまないようにと、指導せねばならないだろう。

われわれは理性につきのように言わなければならぬ。すなわち、われわれが自然原因の探求において決して果てまで達せず、被制約者から被制約者へと無限にいたつて進行してゆくといふこの事情は、現実の客観的な世界においては、継起も多様性も、始まりも終わりも、あるいはなんらかの限界づけも、無限の可分性も不可分な

部分も成り立たない、ということに由来するのだ、と。これらいつさいは感性界においてのみ成立し、悟性界では成立しないもので、仮象と錯覚にすぎず、われわれが自分自身を現実的な実体だと思うような想像と同じなのである。むしろ、なにかが実存在するというなら、ただ唯一の実体があるだけであり、これは唯一の物、自体、唯一のヌーメノン、すなわち観知的で客観的な世界である。これはみずから自身を限界づけており、これは始まりも終わりももたない領域である。これが純粹理性の唯一の理想である。

それゆえ仮象と實在のこの理論にしたがうなら、純粹理性の理念とはおおよそ、スピノザが述べたような意味のものだと、申し立てなければならぬであろう。人も知るように、スピノザにとっては世界が唯一の実体であり、自己自身を完結する系列、あるいは限界づけられない領域である。彼にとってはこれは、神性を代理するものなのである。

思考する無限な実体は無数の思考する有限な諸実体からは合成されえない（「のではないか、」という重要な反論に対しては、著者の理論によってこそスピノザの汎神論は安全な立場になるであろう。というのは、われわれの実体性がたんに論理的で仮象的なもので、われわれの私（「自我」）が自己意識にほかならず、そしてこれはたんに諸表象の連関のために主観的に必要なものにすぎず、他の諸変様のある一変様であるというのなら、それなら、これらの表象のすべてが唯一の実体の諸変様であるべきなのだ、なんの妨げもなく言えるではないか。

それゆえ、時間規定と、時間規定に関わるあらゆる表象が、たんに仮象的で主観的であるならば、理性はみずからの要求のいつさいがスピノザの体系のなかで充足されるのを見てとるであろう。また、もし理性がさらに個別の神性を探究しようと欲しているのだとしたなら、理性はそのような要求を正当に充足させることはないであろう。すくなくとも、いまや真理の関心は、悟性界のほかにはいかなる神性をも要求しないのである。

物自体への客観的な関係が前提されねばならない

これはまたしても「著者の体系から導き出した」帰結である、と言われることだろう。しかもそれは、カント氏の理論を悪意に満ちたしかたで【98】照らしただす帰結ではあるが、しかしそれ自体としては氏の理論を反駁するのに資するものではない。たしかにそこからはスピノザ主義のための演繹をとりだすことができるが、「いずれにせよ」知られるかぎりでは、カント氏はこれまでのところスピノザ弁護に関して誇るべき手柄を立てたわけではない。

これがたんなる帰結であることは本当であり、しかもそれが悪意に満ちているように見えるのは残念なことではある。そしてこのような帰結はまた、このかぎりではカント氏の理論に対する反対証明になるわけではない。ただ、まさにこの理論が、この深遠なる哲学者の体系のほかの部分と整合せず、べつのところの原則や要求と矛盾しているように見えるということを示すためには、その帰結（の帰趨）を最後まで辿っておかなければならなかっただけである。

その「べつの原則の」なかには、『プロレゴメナ』で述べられた以下の言明も含まれる。「経験の領野を超えて理性の使用を独断的に押しひろげてはならないというヒュームの原則に、われわれはヒュームがまったく見過ごしたあるべつの原則を結びつけよう。すなわちそれは、可能な経験の領野を、われわれの理性の目で見みずからを限界づけているものだと見なしてはならない、という原則である。」[*Prolegomena*, Ak. IV 360（からの再構成）]

この新しい原則がわれわれをどこに導いてゆくか、見届けてみよう。この原則の意味はまさに次のことではかありえない。すなわち、理性は現象だけではなく物、それ自体をも想定せねばならないのであって、現象は物自体へと

関わり、現象の根底には物自体が存する。というのも、私の間違いでなければ、著者がまさに同じ箇所の説明しているように、「現象はつねに事物それ自体を前提し、事物それ自体がさらに詳しく知られるか否かにかかわらず、事物それ自体を指示している」[*Prolegomena*, Ak. IV 355 (一部省略)]からである。

もしこうなら、それゆえ客観的な世界の現存在もまた、もはや蓋然的なものではないであろう。感性界における現象は悟性界における實在性を指し示すであろう。しかし「また」、たんに實在的な客観があつて現象するということだけではなく、客観がそこに現象する、「現われ先としての」主観、あるいは客観をそれ自体のあるがままにではなく表象する主観もまた想定されねばならないであろう。この主観は、根源的かつ本質的な意味で、思考し表象する主観でなければならないが、というのも思考作用と表象作用は、そのもつて現象がそもそも可能になるところの「現象の」必然的な条件だからである。

それどころか、思考する主観の現実的な実存在は（その批判的観念論によって、現象する客観と、客観がそれに現象してくる主観とに、その現実的な現存在に關してまったく同じ程度の確実性あるいは不確実性を認めている著者が、これに反対してなにを言おうとも）、現象の可能性のためには、【99】客観的に實在的なものよりも、いさう必然的〔に必要〕な条件である。というのは、（バークリーの観念論が証明するように）外的世界についての表象のいっさいが、實在的な或るものに根拠づけられずに、空虚な錯覚であり、あるいは主観的な思考力のたんなる変様であるということは、すくなくとも考えられうることであるが、しかしながら、主観が実存在しないで変様がある——この変様は主観のもつ変様である〔にもかかわらず〕——、あるいは主観の力がないのに發揮された諸力が実存在している、といったことは、おそらく考えることもできないことだからである。

さて、現象が實在的な客観へと関わっていると、あるいは實在的な客観が現象の根拠に存していると、前提され

るならば、現象と客観とのあいだになんらかの関係を想定しなければならぬ。そしてこの場合、この関係はたんに主観的（あるいは仮象的）なものなのか、それとも同時に主観的にして客観的（あるいは実在的）なものなのか、ということが問われる。

その関係がたんに主観的なら、そこにあるのはただ私の思考能力の本性だけであり、すなわち現象を考えたときには、私はまた仮象から区別される或るものを私のそとに考えて、それが現象するのだと（する一方）、さらに私のなかにもべつの或るものを考えて、それに対して現象してくるのだとしなければならぬ、ということであろうが、「いずれにせよ」私の思考力のこのような主観的な法則からは、いささかも、ここで現象しているものや、これがそれに対して現象しているものの現実的な実在性や実存在について、有利な事情が帰結するわけではない。さて、そうすると、われわれは無限にいたるまで現象（だけ）をもち、われわれのビュロン主義には際限がなく、たんに、それがわれわれに「仮象的に」現われているように見える（*es scheint uns zu scheinen*）、と言わなければならぬし、「さらには」こうなれば、われわれの個体的な現存在についてさえも、われわれが思考する主観であるのかどうかについてさえも、疑わなければならぬのだから、デカルトの「私は考える、ゆえに私はある（*cogito, ergo sum*）」は不確かな原則である（「ということになるう」）。

だがこの果てなき懐疑のラビリンスから抜け出たいならば、われわれは現象と物自体とのあいだの関係はたんに主観的で仮象的ではなく、また客観的で実在的でもあると宣言せねばならない。あるいは、真の実体について、悟性界について、理性の理想について、一言にしていえばヌーメノンについてわれわれの悟性がつくりあげる概念は、たんにわれわれの思考力の本性——思考力の活動と思考作用の主観的な形式としての——にのみ根拠をもつものではなく、また客観、ヌーメノンにも根拠をもつものであって、したがって、これらの概念に対応する真の実在的な

対象がないならば、われわれの魂はこれらの概念を有しえず、有することもないのである、と想定せねばならないのである。

以上のような次第であるならば、われわれはさらに、ヌーメノン——理性はこれを現実的に実存するものと想定せねばならない——は、われわれの思考能力がそれをどのように表象するかという様式と方法に関しても、**[100]**ある程度は貢献していると想定せねばならないであろう。このさい、この思考能力があるいは感性として、あるいは悟性として、あるいは理性として發揮されていても同じことである。それゆえこれらの認識源泉はいずれも、物それ自体を表象する様式と方法に関して、もちろんそれぞれ個別に割り当てられた法則、あるいはそれぞれの主観的な形式に従うにせよ、しかしまたその直観、概念、理念の根底に存している物それ自体の本性にも従わなければならないのである。

#### 空間と時間についての私の把握

以上のことが前提されるなら、いまやまた、空間と時間という、著者にとつてはかなり重要な、その批判体系全体の支柱の役割を果たしている概念について、いささか異なったしかたで捉えて規定せねばならないことにもなる。すなわち、空間と時間の概念はまた関係概念としても説明されることになるが、それはたんにわれわれの感性の本性に根拠をもつのではなく、「あるいは」カント氏の言うところとは異なり、感性のたんに主観的な形式をなすものではなく、「むしろ」空間と時間のなかで現象してくる物それ自体の本性のなかにも根拠をもつものとして考察されなければならない、それゆえおおよそ空間・時間についてのライブニッツ的な考えかたが成立するということになる。

しかしながら、このライブニツツ的な概念は、著者の攻撃に対して身を守ることができらうか。見てみることにしよう。ただしまず、それぞれ種的に唯一のものであるこの二つの対象について私が考えているところを、さらに詳細に説明しておかなければならぬ。そこで私の考えによれば、空間と時間の概念は端的に経験的なものではなく、アプリオリな概念にも数え入れられる。それらは叡知的な世界と感性的な世界との限界をなし、両者をたがいに結びつけており、すなわち物自体そのものが現象になることを可能ならしめている。

空間と時間の概念のこのような混合的な本性によって、われわれはある程度は、なぜ空間と時間はそのように特異で、種として唯一のものなのか、なぜそれらを物とみなすことがわれわれの悟性にとって不可能であり、それらと時間として捉えることがわれわれの想像力にとって不可能であるのか、を説明しようようになる。すなわち空間と時間は、われわれの能動性とその対象とのあいだに、合一的あるいは統合化的な媒介（主観的なものと客観的なものとのあいだの）として、中間的に介在しており、両者に接触しているために、どちらの側からいわずに、かを引き継いでもっている。空間と時間のこのような中間的本性のゆえにこそ、それらをこちらの側面から、あるいはあちらの側面から捉えるにに応じて、それらがある程度は（主観と客観の）どちらの側にも数え入れることができるのである。

空間と時間は、主観的なものに、すなわち【101】私の考えるように、人間の思考力が制限されているというところに根拠づけられているかぎりでは、アプリオリな概念という本性をもつ。しかしそれらは、物、それ自体に、あるいは客観的なものに根拠づけられているかぎりでは、すなわち空間のほうは表象される物それ自体の現実的な多数性に\*、時間のほうは同時にそれらの多数性と現実的な変化（の両方）に根拠づけられているかぎりでは、経験的な表象との、あるいは経験概念との類似性をもつにちがいない。

\* 一般的にはつぎのように言えるだろう。われわれの自己から区別される（空間のなかで直観される、あるいは感じられる）多数性は、それがたがいに区別されていない場合、そのかぎりでは、延長、連続量（*quantitas continua*）の概念を与える。しかし、われわれの自己からだけではなく、またたがいにも区別されている多数性は、数（分離量 *quantitas discreta*）の概念を与える。さて、一般に多数性の区別はこれ以上にはなされえないのだから、ここから、多数性についてのの普通学（純粹数学）には、その部門としてまさに、純粹代数学、すなわち数量（*quantitas discreta*）の普通学と、純粹幾何学、すなわち連続量（*quantitas continua*）の普通学があり、またこれら以上はありえない、ということが分かるだろう。

われわれが制限されていることが根拠になって、われわれは外的感官の対象、とりわけ視覚の対象を、それがわれわれの自己から区別されるべきであるかぎりで、われわれのそとに措定する、すなわち空間のなかで知覚するの  
でなければならなかった（「ということが帰結する」）のである。こうして、空間の概念が生得的な概念であり、あらゆる感覚に先行し、あらゆる直観の根底に存しなければならぬ、というように思われることもありうるし、また  
そう思われるにちがいない。

しかしながら、空間と時間のなかには経験的なものが混入していないということを、われわれはいかにして確認  
しうるだろうか。あるいは、そのような混入はおきないと証明するための拠りどころはあるだろうか。視覚と触覚  
によるわれわれの最初の知覚は成立するのは、われわれがまだ、空間の概念か対象の概念かのどちらが魂のなかで  
先にあつたのか、それともむしろそれらは魂のなかで同時的にあるのではないか——私にはそう思われる——、と  
いうことについて、意識〔して決定〕することのできないような年齢でのことである。すくなくとも〔言えるのは〕、  
空間が関係概念であるなら、後者の選択肢が正しい〔、ということである〕。というのもその場合、空間は、関係



のなかにある諸物につづいて、すなわち対象とわれわれの自我（この自我はまさにこの表象を介して自分を対象から区別しなければならぬ）につづいて、ただちに魂のなかになければならぬからである。

【102】「ヤッコロフ」生来の盲人はいかにして空間を考えるのか、とりわけ、生来の盲人で深い学識の数学者であったサンダーソン〔Nicholas Saunderson〕は盲目のなかで光や色について書いているが、彼は空間をどのようなものだと把握していたのか、について知りうるならば、この「見通しの」暗いテーマにもいくらか光が投げかけられるだろう。

空間の表象のなかになんらかの経験的なものが混入していることは、有名なチェセルデン〔William Cheselden〕によって手術された生来の盲人について伝えられている以下の次第からも明らかであるように私には思われる。すなわち、視界が彼に突如として開かれたとき、あらゆる見える対象がまるで直接に自分の眼のうえにあり、眼に触れているように彼には思われた、というのである。それゆえ彼は「それ以前は」、距離についてなにも知らなかったし、ましてや距離の尺度について知るよしもなく、いわばいかなる生得的な幾何学をも有してなかった。そして、われわれはみな、経験をつうじて徐々に、距離について、隔たった対象の大きさについて、判断することを学ぶのではないだろうか。

——しかしここまで説明してきた空間の把握（のしかた）は、いかにして著者のいわゆる純粋直観と調和しうるだろうか。純粹幾何学のもつ、あらゆる経験から独立した確実性と明証性は、いかにしてこの空間の把握に合致するだろうか。調和を成り立たせることは可能だ、と私は思う。

直観されるものはずべて空間のなかで知覚されなければならないということを考えてみるならば、われわれにとつて空間とは、どの直観や外的知覚にも「妥当する」普遍的なものであり、直観や外的知覚が空間以外の点ではどれ

ほど異なつてさまざまであらうとも、くりかえし妥当する関係概念なのである。とするならこの概念を、一方では空間のなかでわれわれに与えられている諸対象そのものから、他方では空間中の諸対象の形態や位置をなす個別的な制限から抽象してきて、それ自身で存立し、「整合的に」たがいに連結した、一様の形のひとつの全体として思い浮かべることで、普遍的な空間の概念を、そのなかに物体あるいは対象が存在しうる貯蔵庫として構想する、あるいはむしろ案出すること、なんの差し障りがあるだろうか。

ここまで来てはじめて、われわれはこの普遍的な貯蔵庫をいわば区画に分けて、それにさまざまな形状を与えたり、あるいは空間にさまざまな制限や変様を割り当てたりすることができる。これらの区画によって、われわれが諸対象に指定する場所が与えられ、普遍的な空間の制限や変様によって、さまざまに異なつた形態や位置が与えられるのであり、これらはわれわれが任意に構成する、想像力の産物にほかならない。

こういうわけで、このように構成されるものには、われわれ自身がそれらに付与するものがうまく妥当するにちがいないのであって、それらの構成は、【103】われわれがそのように作りあげるものでなければならぬ。いまや、われわれが構成したのとまさに同じ形態と位置を対象がもっており、われわれの区画に対象が合致しているということが判明するときには、また対象の形態と位置についても——それらが想像力によって構成されたものであることに程度をあわせて——、われわれの想像力の産物について当てはまり真であることが、そのまま当てはまり真となる。

著者の空間・時間論は私の把握を反駁しているか

さて以下では、著者のそのほかの「論証による」根拠が、空間と時間についての著者の把握だけが真理を独占す

ることを証明し、私が提示した把握のもつ妥当性を反駁しているかどうか、を見てみよう。著者によれば、「空間と時間はまったく必然的な表象であり、われわれにまったく必然的に貼りついている。われわれは空間と時間からすべての対象が取り除かれたと考えることができるが、しかし空間と時間そのものが取り除かれたと考えることはできない」[Erläuterungen 22 (組み替えて引用)]。

時間の概念が取り除かれたとわれわれには考えられないのは、すべてのわれわれの思考が継起的であり、したがって時間のなかで生起しており、まさにこの継起的な思考がわれわれを時間の概念へと導くということからしても、すでに明らかである。しかし、時間の概念も空間の概念も一部は主観的で、われわれの精神の本性に、それもわれわれの制限のなかに根拠づけられているのであれば、この制限はなにか本質的で恒常的なことであり、それゆえ空間と時間の概念もまた「そこからの」帰結として、あるいは切り離しがたい付帯的事情として、必然的でなければならない。

われわれの思考力の本質的な制限によって、空間と時間の概念はわれわれの感性の必然的な条件になり、この制限からの避けられない感情にわれわれは強いられて、対象はわれわれの感性にかかわっては空間と時間の関係のなかに立たなければならぬのだと、つねに期待するようになる。われわれは一方では、対象をわれわれのそとに置く、すなわち空間のなかを見ることをしないかぎり、他方ではそれをたがいに相継いで、すなわち時間のなかで知覚することをしないかぎり、対象をわれわれの自己から区別することも、たがいに区別することもできない。しかしこのような事情はいささかも、空間と時間の概念がまた客観的な基盤をも有するはずだということを妨げるものではないのである。――

〔著者はいう、〕「空間と時間のあらゆる公理は確然的な確実性をそなえており、したがって経験から引き出すこ

とができないものである。経験から引き出されたなら、われわれはただ、普通の知覚はこう教えている、と言うことができるだけであり、そうでなければならぬ、と言うことはできない。それゆえ空間と時間はあらゆる経験に先立つものであり、たとえばさまざまな空間はたがいに相継いで生じるのではないし、【104】さまざまな時間は同時にありえず、二つの点のあいだにはただ一本の直線だけが可能である等々の原則はアプリアリな命題である。」  
〔Erläuterungen 22 (からの再構成)〕

私の考えでは、空間と時間についての私の把握にしたがつても、まさに以上のようにでなければならぬ。というのは、空間と時間の概念が表現しているのは、物それ自体がわれわれの感性に対してもつ関係——この関係はわれわれの精神の本質的な制限によって必然的なものになる——であつて、「それぞれ」空間の概念は、客観そのものにせよその変様にせよ、それらの変化を考慮しないでの多数性を、時間の概念は、それらの変化を考慮したうえでまさにその多数性を表現しているのであつて、そうであれば、これらのさまざまに異なつた関係がたがいに取り違えられることがないというのは、おのずから明らかだからである。それゆえ「また」、このような「関係の」異種性を言い表わす公理がある関係からべつとの関係へと転移されることはありえず、さまざまな空間はたがいに相継いで生じるとか、あるいはさまざまな時間が同時にあるとかと、われわれには言うことができないのは、おのずから明らかである。

〔二点間の一直線という〕第三の公理に関していえば、それは二つの客観の必然的な関係——この関係は二つの客観の性質ではなく、それらの現実的もしくは推定的な現在存在に依存する——を表現するものである。その公理が言うのは、根本的には、二つの客観は、「現に」それらがそこに想定されている位置に現実的に存在するのだ、ということ以上ではない。それらの位置がそれらの距離を規定するのであり、「それゆえ」距離はただ唯一のもので

しかありえない。

部分の直観が先で、そこから無限な全体が構想される

空間と時間は論弁的で一般的な概念ではなく、直観であるということの著者の証明根拠も同様に、私の把握に抵触するものではない。というのも私は空間と時間の概念を、抽象を介した推理からではなく、われわれの感性に対する物、それ自体の必然的な関係から導き出したのだからである。空間と時間はいつでも客観とともに知覚され直観されなければならないので、とりわけ空間の概念は必然的な付属であり、あるいはどの外的な現象にも一緒に付けて置かなければならない周辺状況である。

存在するもの、外的な感官の客観であるべきものは、どこかにある、すなわちある場所を占めるのでなければならぬ。という命題を、われわれは推理にではなく、われわれの制限についての不可避の感情にしたがって認めている。しかしながら、ひとつの普遍的で空虚な空間があり、あらゆる諸空間や場所はそれを合成する諸部分なのでなく、その制限〔されたもの〕であるという命題は、一部は想像の産物であり、一部は推理の仕事である。だがそれは生得的な命題ではなく、だれかが視覚を使わずに、また他人から教えられずに、そして思考において自分で訓練せずに、述べるようなたぐいの命題ではない。【105】

いずれにせよ私の考えでは、空間と時間は一部は客観に根拠づけられており、それゆえそのかぎりでは経験的になろうし、またそれらは直観であって、抽象ではない。それだから私はまた、著者のいう、時間と空間についての原則はすべて総合的な命題であるから、時間と空間は一般的な概念ではなく直観でなければならぬ、という論拠をも、よろこんで承認することができるのである。——すなわち、空間と時間は、客観的なものに根拠づけられて

いるかぎりには、直観なのであり、あるいは、関係のなかにある諸物と同時に知覚される関係なのである。しかし空間と時間は、諸物から〔抽象的に〕切り離されてしまったら、想像力の産物、すなわち、これまで示されたような、またさらに示すことになるようなしかたで作りあげられた、普遍的な空虚な空間、あるいは無限な空虚な時間ということになる。

——私はまた、著者のつぎのような推理をも、著者がそこから引き出した最後の帰結に関して、すすんで認めることができる。「われわれは空間も時間も無限な量として表象するから、したがってその諸部分のもつ特定の量はすべて、無限な空間と無限な時間を制限することによってのみ可能なのであり、けっして空間と時間についての一般的な概念にもとづいて可能になるのではない。それゆえ空間と時間が直観ではなく一般的な概念であるとするならば、量の概念や関係の概念は空間と時間においてまったく可能ではないであろう。」[*Erläuterungen* 23 f. (一部補正)]

ここで提起されている、空間と時間における量や関係の概念の成立〔のしかた〕については、さらに注意を促しておきたいことがある。著者はつぎのように主張している。すなわち、ある測りえぬ〔ほど大きい、不可測の〕空虚な空間と無限な空虚な時間という、ある意味では生得的な概念が、すべての規定された特定の空間や時間の概念の根底に存しているのでなければならず、それゆえ特定の空間や時間またはただ最初の無限な空間や時間を制限することによってのみ獲得されるのであり、すなわち特定の空間や時間は本来、不可測の空間と無限な時間のなかに作られる、ある切れ目にほかならないという次第なのだ、と。

私の意見では、真相は逆さまであって、制限された諸空間あるいは場所、特定の時間の概念のほうが魂においては先であり、それぞれの直観や感覚において、〔それらの時間や場所が〕あわせて直観され知覚されうるものにな

る。これにもとづいて想像によつてはじめて、不可測の空間や無限な時間が構想されるわけである。さて、これらの〔無限な空間や時間の〕概念を得てはじめて、哲学者たるものがこんどはこの概念のほうを基礎に置くことができ、著者のいうように、【106】あらゆる個々の空間と時間はまさに〔それぞれ〕その制限されたものにはかならない、と捉えることができるのである。

すくなくとも哲学の素人には、構想の能力によつて、空間の不可測性と時間の無限性の概念にいたるまで、高まつてゆくことができるにちがいないと思われるだろう。彼はおおよそ、神の全能を描きだそうとした〔旧訳聖書の〕詩編の作者のように、事をなそうとするにちがいない。すなわち〔詩編にいわく〕、「天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府よみに身を横たえようとも、あなたはそこにいます。曙の翼を駆つて海のかなたに行き着こうとも」云々〔詩一三八―八・九（新共同訳による）〕。

\* クロプシュトック〔Friedrich Gotlieb Klopstock〕の「神の遍在についての頌詩」をも参照せよ。  
あるいは永遠性について、かなうならその概念を得ようと試みた詩人のようなものである。

途方もない数を私は積み

何百万もの山々を重ねる、

時のうえに時を巡らせ

そして世のうえに世を山と積み、

こうして凄まじい高みから私は

目眩めまいしながら再びあなたのほうを見るとき

数のもつあらゆる威力は

何千倍にも増していようが、

いまだあなたの片鱗さえも見えない、

私が数の威力を捨てるとき、まっただきあなたが私のまえにある。

〔ハラー (Albrecht von Haller) 「永遠についての未完の詩」(一七三六年)による〕

それゆえ、不可測性と永遠性の概念が、空間と時間における量についてのあらゆる制限された概念の根柢にアブリオリに存しているなどということはまったくなく、われわれがはじめてそれらの概念に到達するのは、制限された概念を無限にいたるまで、すなわち停止することなく、拡張しては纏め上げるときなのである。〔それにしても〕また、制限を混在させることなく、不可測性と永遠性の概念をまったく正確、適切に考えることができるような人は、そもそもどれほどいるのだろうか。〔続〕



## 解題

カントの『純粹理性批判』（初版一七八一年）は、ドイツ哲学界における一つの事件であった。カントの登場に続き、批判する者、注釈する者、解説する者、超克せんとする者、さまざまな哲学運動がその批判哲学をめぐって動きはじめ、かつてない活況の哲学的時代がドイツにもたらされることになる。

この時代の一人にヨハン・シュルツェ Johann Schulze (1739-1805) がいた。シュルツェは一七七六年からケーニヒベルクの王宮説教師であったが、一七八六年からはカントの同僚としてケーニヒベルク大学で数学の正教授をつとめた。一七七一年のカントの教授就任論文の書評を書いたこともあり、カントからその哲学的な資質をたかく買われ、批判哲学の最良の理解者として評価されていた人物である。

このシュルツェによって一七八四年に『カント教授氏の『純粹理性批判』についての解説 (Erläuterungen über des Herrn Professor Kant Kritik der reinen Vernunft)』（＝『解説』）と題する『純粹理性批判』のダイジェスト本（序文にはカントからのお墨付きの書簡が引用されている）が上梓され、ひろく読まれるものとなり、三版を数えた。

なお、この時代の哲学的活況を伝える復刻版のシリーズが「カントの時代 (Aetas Kantiana)」と題してプリュッセルの Culture et Civilisation 社から出版されていたが、その第二四七巻（一九六八年）に、この『解説』のケーニヒベルクで出た一七九一年版のリプリントが収められている。またグーグル・ブックス (Google books) には、初版をふくむ三つの版の画像データが収録されている。

また最近になって『解説』の邦訳が、ヨハン・シュルツ『カント『純粹理性批判』を読むために』（菅沢龍文・

渋谷繁明・山下和也訳、梓出版、二〇〇八年）として出版された。

なお、この邦訳では著者名が「シュルツ」となっている。この姓の綴りは不安定で、『解説』初版の扉ではSchulzとあるものの、ピストリウスはこの書評ではSchulzeあるいはSchulzeと書いている。しかし第二版の扉では著者名はSchulzeに変わる。本人は手紙ではSchulzと署名するようである。やはり「シュルツ」のほうが一般的かもしれないが、拙訳ではピストリウスの書きかたを尊重して「シュルツェ」と称する。

この『解説』の書評者であるヘルマン・アンドレアス・ピストリウス (Hermann Andreas Pistorius, 1730-1798) は、リューゲン (バルト海に浮かぶドイツの島国) の牧師であり、ヒュームの著作のドイツ語訳者として知られるほか、『一般ドイツ文庫』や『新一般ドイツ文庫』などで精力的な書評者として活躍した人物である。続々と現われる哲学や神学の新刊本に、三三年にわたって千本以上の書評を掲載したとのことである。

ピストリウスはこの雑誌上で、理論哲学から実践哲学にわたるカントの主要著作のほとんどに書評を寄せた。カントその人からも『実践理性批判』において、「真理を愛する、鋭利な、それゆえまたつねに尊敬にあたいする一批評家」(KpV, Ak. V, 8) として言及されている。ピストリウスは、今日では忘れられたが、当時、カントの批判哲学に対するもっとも重要な批判者の一人だったのである (なお、ピストリウスの紹介は後述のゲザンク編著の緒論に拠る)。

ここに邦訳した書評は、カントの著作についてではなく、シュルツェの『解説』についての書評であるが、実質的にはカント哲学に狙いを定めた批評であることは一読して明らかであろう。

邦訳は表題裏のページに提示した『一般ドイツ文庫』(Bd. 66, 1. Stück, 1786, S. 92-123) に掲載されたオリジナ

ルに基づいている。このオリジナルの画像データは、たとえば次のビーレフェルト大学図書館による「十八世紀と十九世紀のドイツ語圏における学術的な批評機関誌と文芸雑誌の遡及的なデジタル化 (Retrospektive Digitalisierung wissenschaftlicher Rezensionsorgane und Literaturzeitschriften des 18. und 19. Jahrhunderts aus dem deutschen Sprachraum)」と題する圧巻のプロジェクトのウェブサイト (<http://www.uib.uni-bielefeld.de/diglib/aufklaerung/index.htm>) から辿って見る<sup>1)</sup>ことができる。

新しい活字本としては、ランダウ編のカント批評集 (Albert Landau (Hg.), *Rezensionen zur Kantischen Philosophie, Bd. 1. 1781–87*, Albert Landau Verlag, Bebra 1991) が便利である (一巻と頓挫しているのが惜まれる)。

ちなみに最近では、ゲザンク編のピストリウスのカント批評集 (Bernward Gesang (Hg.), *Kants vergessener Rezensent. Die Kritik der theoretischen und praktischen Philosophie Kants in fünf frühen Rezensionen von Hermann Andreas Pistorius* [Kant-Forschungen Bd. 18], Felix Meiner Verlag, Hamburg 2007) が出版されて、この忘れられた書評者の、忘れられるべきではない洞察をあらためて伝えている。オリジナルの誤植と思われる箇所はこれらの活字本を踏まえて訂正した。

また、サッセン編訳によるカント批評集 (Brigitte Sassen (Hg.), *Kant's Early Critics. The Empiricist Critique of the Theoretical Philosophy*, Cambridge University Press, 2000) には、この書評の英訳が抜粋で収められており、参考にする<sup>2)</sup>ことができた。

これらの新しい刊本からもうかがわれるとおり、同時代のカント批判の動向を明らかにすることは、新しく開かれつつある、さらなる研究の待たれる領野である。当時の人々によるカントの批判哲学に対する諸批判と、それによって惹起される批判哲学の改築やカントによる反駁の試みの全体は、いわば Gegenkritik (反批判／駁論) とで

も称しえよう。拙訳が本邦におけるそのような研究への一助になれば幸いである。

訳文中、【】内の数字はオリジナルの掲載誌のおよそのページ数を示している。「」は訳者による補足などである。ダッシェ（——）は、原文のダュッシェ (Gedankenstrich) のほかに、邦訳の構文を整えるために挿入したものが多し。

カントからの引用は、Ak. の略号につづけてアカデミー版カント全集の巻数・頁数を記した。シュルツェの『解説』からの引用には、*Erläuterungen* に「つづけて初版 (Königsberg, bei Carl Gottlob Dengel, 1784) の頁数を記してある。

またピストリウスの文章は一文の息が長く、段落も切れ目なく続いて読みにくいことがある。邦訳では、原文の段落ごとにゴチで訳者による小見出しを入れたほか、さらに段落を区切って読みやすくすることを試みた。

なお、本号では紙幅などの都合によりおよそ前半の邦訳を掲載し、解題ではおもに人物紹介や書誌的情報などを記したが、次号では後半の邦訳を掲載するとともに、解題では内容に立ち入って、ピストリウスによるカント批判の意義を解説する予定である。